

## ある残酷メルヒェンに関するノート

工 藤 幹 巳

### はじめに

グリム兄弟（兄 Jacob Grimm 1785～1863, 弟 Wilhelm Grimm 1786～1859）の『子供と家庭のための童話集』（Kinder- und Hausmärchen. 以下, KHM という）には残酷な話が多いと言われ, しばしば批判の対象とされることもある。ナチス批判の道具にされたこともあった。真っ赤に焼かれた鉄のスリッパを履かされて, 死ぬまで踊りつづけなければならない王妃（白雪姫）, 鳩に両目を突かれて盲目となる継姉妹（灰かぶり）, 継母に殺された上スープにされ, 父親に食われてしまう男の子（柏楨の話）, 等々, たしかに枚挙に暇がない。しかし, 残酷な場面や話は, 他の国の昔話にも非常に多く見られるのであるし, このような残酷な場面には, それなりの因果応報的根拠や勧善懲悪の理由があったり, 最後に救いがあったりするものが普通であって, 残酷な場面だけを取り上げて非難するのは妥当なこととは言えない。

ところで, KHM は, 1812年の初版から1857年の最終版までに, 7回改版されている。そのうち第2版（1819年）と第7版（1857年）とでは, 文章の加筆・訂正はもちろんのこと, 作品自体の削除やそれに伴う挿入など, かなりの手が加えられている。第2版以降削除された話は, 初版2巻中の第1巻に限っても85話中28話<sup>(1)</sup>もあって, かなり多いと言ってよい。

その中に, 『子どもたちが屠殺ごっこをした話』(„Wie Kinder Schlachtens mit einander gespielt haben“) という際立て残酷な話がある。初版ではKHMの22番I, IIとして収録されたものだが, 第2版以降削除されて, 現在のKHM 200話の中には入れられていない。他の削除された話と比較して, 『子供たちが屠殺ごっこをした話』（以下, 22番という）は, いくつかの点で

特異な位置にあると思われる。この小論は、この話のKHM中における特異性を指摘し、削除されるに至る状況の分析を試みるものである。

## 1. 『子どもたちが屠殺ごっこをした話』本文

### I

西部フリースラントにあるフラネッカーという町で、5才とか6才といった幼い子どもたち、女の子と男の子たちが遊んでいました。みんなは役割を決めて、ある男の子は豚をつぶす人に、別の男の子は料理人に、もう一人の男の子は豚になることにしました。それから、女の子にも役を決めて、一人は女の料理人、もう一人は料理人の下働きになることになりました。この下働きは、腸詰めを作るために、小さい入れ物で豚の血を受ける役目でした。豚をつぶす人は、話し合って決めたとおりに、豚役の子につかみかかって引き倒し、小さなナイフで喉を切り開きました。そうして、料理人の下働きが小さい入れ物に血を受けました。そこへ偶然通りかかった市の議員が、この惨劇を目撃しました。彼はすぐさまその豚をつぶす人をつかまえて、市長の家に連れていきました。市長はただちに全議員を集めました。議員さんたちは、この事件のことで長いこと話し合いましたが、男の子をどうしたらいいかわかりませんでした。子どもごころでやったあやまちだということは、よくわかっていたからです。議員さんたちの中のある賢い老人が知恵を出しました。裁判長が片手においしそうな赤いりんごを、もう一方の手に1グルデン銀貨を持って、子どもを呼び、両手を子どもの前につきだしてみるといい。子どもがりんごを取ったら、無罪と認めてよかろうし、もしも銀貨を取ったなら、死刑にするのがよかろう、というのでした。その人の言うとおりにすることになりました。子どもは笑いながらりんごを取りましたので、それで、その子は何にも罰を受けなかったということです。

### II

あるとき、お父さんが豚をつぶしましたが、それをその子どもたちが見て

いました。やがてお昼すぎになって、子どもたちが一緒に遊ぼうということになったとき、一人の子がもう一人の子に、「おまえ、豚におなり、ぼくは豚をつぶす人になるから」と言って、ナイフを手にするや、弟の喉を突き刺しました。上の部屋で、赤ちゃんをたらいに入れて、お風呂をつかわせていたお母さんは、その子供の叫び声を聞いて、すぐに駆け下りてきました。そして、何が起きたかわかったとき、子どもの喉からナイフを抜くやいなや、逆上して、豚をつぶす役だった子の心臓を突き刺してしまいました。それからすぐに、たらいの中の子はどうしているかと思って上の部屋に急ぎ戻ってみると、そのあいだに、赤ちゃんは溺れ死んでいました。そのため、この妻は不安が嵩じて絶望に陥り、下男や下女の慰めに耳を貸すどころか、自分で首を吊って死んでしまいました。夫は畑から帰ってきて、一部始終を見てとると、大変に悲しんで、それからまもなく、彼も死んでしまいました。

## 2. 出典との関係

KHM のそれぞれの話の出自由来の中で、最も多いのは個人からの聴取である。<sup>(2)</sup>しかし、この22番 I の出典は、ハインリッヒ・フォン・クライストが主宰となり発行していた『ベルリント刊新聞』(„Berliner Abendblätter“ 以下、BA という) の、1810年11月13日付、第 38 号に掲載された、『無邪気に他の子を殺してしまった子供』(„Von einem Kinde, das kindlicher Weise ein anderes Kind umbringt“<sup>(3)</sup>) である。両者間の本文の語句にはほとんど違いはなく、22番の I は BA の話をそっくりそのまま転載した、と言っているが、語句以外ではいくつかの相違点があるので、以下にあげることにする。

### 1) 題名の違い

語句や句読点の使い方に関しては、ごくわずかな違いが認められるが、ほとんど同じものと言ってよいほどである。しかし、BA に掲載されたものは、『無邪気に他の子を殺してしまった子供』という題名であるのに対し、KHM では『子供たちが屠殺ごっこをした話』である。原題のドイツ語を見ても、BA では „Kind“ (子ども) が 3 回使用されていること、中でも „kindlicher

Weise“（子どもらしいやり方で、無邪気に）という言い回しが使われていることが、いかにも「子どものしたこと」を強調させている。「殺す」行為も „umbringen“ で表される。

一方、KHM の題名では、「子ども」は1度だけ複数の „Kinder“ でまとめられている。「殺す」行為は „schlachten“ で、正に「屠殺する」であり、おまけにこれが名詞化して、 „spielen“ 「遊ぶ」の目的語となっている。およそ遊びとは相いれないはずの話、「屠殺する」が遊びの対象になっているわけである。

後者の方がより直接的に残酷性が伝わってくるのは否めない。

## 2) 22番のⅡはBA にはない。

BA に掲載されたのは、上記の『無邪気に他の子を殺してしまった子供』のみであり、22番のⅡに相当する話は載っていない。Ⅱの出典は別である。

22番のⅠには、救いがある。子どもの裁き方と、笑ってりんごを選ぶ子どもの行動とに。しかしⅡには、それが無い。登場人物のすべて、それも家族が全員、無残な死に方をして終わりである。このⅡがあることによって、残酷性が増し、Ⅰの「救い」が霞んでしまうのである。

## 3) BA は解説付きである。

BA には、本文に続いて次のような解説が付いている。

「ある古い本からのこの感動的な話は、ヴェルナー<sup>(4)</sup>の『2月24日』と題する最近の小悲劇によって新たな関心呼び起こしている。この悲劇は、ヴァイマールとラウホシュテットにおいて、すでにしばしば非常に活発な関心をもって、恐らくは近代の詩人の作品ではないものとして、見られている。悲劇の中で運命という不安な短刀であるその忌まわしい殺人のナイフは（恐らくはマクベスが手にして王の寝室へ行くのと同じ短刀であろうが）、一人の男の子が別の子を殺してしまうときのナイフと同じものである。ヴェルナーが上の話を完全に知っているのか或いは語っているのかは、我々にはわからない。なぜなら、ヴェルナーのあの卓越した作品、これにはただ3人

の登場人物、父親と母親と息子、スイス風の農家の部屋、引き出し、ナイフ、それに冬がやがてもたらず雪が少し、などが必要な小道具であるが、この作品は、我々の（ベルリンの）舞台ではまだ上演されてはいないからである。だが、我々はこれを上演するのにヴァイマルの人々以上のものをあり余るほど持っているのだ。イフラントのような男優、ベートマンのような女優、それに息子を演ずるための俳優を。出来うるなら、この小さな記事が（我々の劇場での上演にたいする）意味と良き意志とを喚起してほしいものである」

このような解説が、それも直接この話の解説ではなく、ヴェルナーの『2月24日』について述べている解説が本文に続いているのであるが、これと、KHMのように本文のみが提示されている場合とを比較すれば、明らかに後者 KHMの方が、話の残酷な内容が鮮烈に残る。

また、BAの解説の冒頭で、筆者は「この感動的な話」<sup>(5)</sup>と述べているが、ここからも筆者の関心が、忌まわしい子どもの殺人行為にではなく、その子どもの裁き方と裁きの場での子どもの（りんごを選ぶという）行為にあることがわかる。BAでは、日本の「大岡裁き」に似た痛快感を筆者は感得しているのである。

#### 4) 読者層の違い

もともとKHMとBAでは、その対象とする読者が違っていた点も指摘すべきであろう。初版当初は一種の研究書的性格を持ち、詳しい注釈が付いていたとはいえ、KHMは、その名のとおりに『子供と家庭のための童話集』であって、この当時子どもが自分では読めないにしても、大人から読んでもらうことのできるものとして編まれたものである。後に触れるが、子どもに対する教育への関心が芽生え始めた時代的背景もあって、読者としての「子ども」は無視できないものとなっていた。

これに対してクライストのBAの方は、創作短編小説の連載、劇評や芸術に関する小論、時事的問題についての論評、といった明らかに子ども向きではない記事を扱う新聞である。『無邪気に他の子を殺してしまった子供』を

掲載するにしても、すでに見たとおり、解説はヴェルナーの『2月24日』という悲劇についての論評に終始している。

以上のような相違点は、残酷性を生々しく伝え過ぎるという意味において、いずれも KHM 22 番にとって分が悪いと言える。

### 3. 他の第2版以降削除されたものとの関係

初版(1812年)第一巻85話から第2版以降削除されたものについて、①削除記号の有無、②その記入箇所、③削除理由、④削除後の扱い、について調べると、表1のようになる。表中、枠で囲んだ箇所に注目したい。

①②の削除記号の有無とその記入箇所であるが、目次欄に削除記号が記入されているものが22番を含めて4話(目次ではⅠ、Ⅱと分けて22番を1話としている)、と少ない。これを書き込んだのは、ヤーコプであるとされている。<sup>(6)</sup>一方、本文欄に削除記号が記入されているものは、19話(85番を4話に分ければ22話)と多くなる。

ここで問題なのは、22番の本文欄にはこの削除記号が書き込まれていないことである。またその反対に、本文欄にはあっても目次欄には書かれていない話が16話(19話)もある。これらの2つの欄の記号の記入に統一性がないことは否めない。しかし、実際に第2版以降に削除された話との関係から考えると、本文欄の記述の方が主たるものであり、目次欄の削除記号の記入の方は副次的意味しかないと判断される。とすると、22番の本文欄に削除記号が書かれていないのはなぜだろうか。

表1の③削除理由欄で、22番は不明(?印)としてあるが、1つだけ考えられる理由がある。A. v. アルニムが、22番を KHM に入れたことを、ヴェルヘルムに宛てて次のように非難している。<sup>(7)</sup>

「すでに私は、子どもが別の子を殺すという作品について、或る母親が、とても自分の子どもたちにはこの話は聞かせられない、と嘆いているのを聞いたことがあります。」

表1.

初版(1812) KHM Nr.	①削除記号 (有○無×)		③削除理由		④削除後 補遺Nr.	注Nr.
	②目次欄	本文欄				
6	○	○	Herk.		1	—
8	○	○	Herk.		2	—
22 I II	○	×	?		3 I II	—
27	○	○	Alleg.Herk.		4	—
16	×	○	?		—	62
32 II	×	×	?		—	32
33	×	×	Abhän.		5	—
34	×	×	?		—	34
36 II	×	×	?		—	36
37	×	×	Verw.		6	—
43	×	×	Verw.		7 (1857)	—
54	×	○	Verw.		8	—
59	×	○	?		—	127
60	×	×	?		—	60
61	×	×	?		—	61
62	×	○	Abhän.		9	—
64 I	×	○	?		—	57
64 III	×	×	?		—	63
66	×	○	Verw.		10	—
68	×	×	?		—	88
70	×	○	Abhän.		11	—
71	×	○	Abhän.		12	—
72	×	○	Versform		13	—
73	×	○	Herk.Verw.		14	—
74	×	○	?		—	60
75	×	○	?		—	29
76	×	×	?		—	76
77	×	○	fragm.		15	—
81	×	×	?		—	82
82	×	○	schlechteste		16	—
84	×	○	?		Bruchstück Nr.5	—
85a	×	○	Herk.fragm.		17a	—
85b	×	○	?		—	—
85c	×	○	Verw.fragm.		17b	—
85d	×	○	Verw.fragm.		17c	—

略字等説明    Herk. (Herkunft, 他国起源)、alleg. (allegorisch, 寓話的)  
 Abhän. (Abhängigkeit, 依存)、Verw. (Verwandtschaft, 類似)  
 Versform 詩形式、schlechteste 最悪、Bruchstück 断編  
 fragm. (fragmentarisch, 断片的)

これに対してヴィルヘルムは、反論するように、「私は子供の頃、母から  
 屠殺ごっこ話を聞いたことがあります、それで私は遊ぶとき十分気をつ  
 けるようになりました」と答えている。

つまり、レレケの指摘するように、このアルニムの意見を考慮した結果削  
 除したのだ、と考えるのが削除の理由としては妥当であるし、この他には証

明しうるものは何もない。しかしヴィルヘルムは、決して積極的に削除したのではないであろう。アルニムへの反論の言葉のみではなく、22番の削除後の扱い（表1の④）を見ても、そう判断していい。表1でわかるように、削除理由が不明な話は、そのほとんど全てが「注」(Anm.)にまわっている<sup>(9)</sup>。しかし22番だけは、注にではなく、補遺(Anhang)に入れられている。他の話の注に入れられたものと違って、類話もなく、独自なものを有していたからであろう。

#### 4. 削除に至る最終的判断

三つの基準を満たしているか

レレケは次のように指摘する。「1815年以降、特に1819年以降、新しく加えられた話は、主として、古い本、当時の雑誌、メルヒェン集などの文献から汲みとられた。メルヒェン蒐集の、この後期の段階には、一群の話が特に重要な役割をになっている。それは、メルヒェン蒐集の最初の段階で、やはりいくつかの手本が決定的に重要な役割をになっていたことを思いおこさせる。一中略一（ヴィルヘルムにとって、書物から話をとる際）基準になったのは、最終的に口伝えに由来するという主張あるいは推測、注目に価する内容、適度に芸術的な語り方、この三つである」<sup>(10)</sup>

この三つの基準のうち、後者二つ、「注目に価する内容」「適度に芸術的な語り方」については、22番は基準を満たしていると考えられる。問題は、「最終的に口伝えに由来するという主張あるいは推測」という基準であろう。

初版のKHMの注釈(Anmerkungen)の中で、22番に関する注釈は非常に興味深いものである。その出自由来を、Iについては、クライストのBAからとった、と簡単に書いているにすぎないが、IIについては、新たな話が紹介されているのである。IIの出自由来を逆上っていくと、1600年のある古い文献に行き当たる。

「(その文献には) こう書き添えてある。この出来事のあった時代に生き、自ら完成された詩人でもあった教皇が、その出来事を2行詩に書いてお



こうとしたが、出来なかった。そこで多額のお金を出して誰かに依頼することにした。一人の貧しい学生が稼ごうと思って、長いこと努力苦しんだが、無駄だった。とうとう彼は、不機嫌にペンを投げ出して、叫んだ。

『僕には出来ない、こんなこと悪魔がやればいいんだ！』すると、すぐに悪魔が現れて、俺が代わりにやってやろうと言って、ペンを取り、こう書いた。

sus, pueri bini, puer unus, nupta, maritus  
cultello, lympha, fune, dolore cadunt.<sup>11)</sup>」

注釈は、この次に、「最近ヴェルナーが、2月24日という彼の悲劇の中でこの古い寓話を使い、それでも悪魔に対する人間のポエジーの力を示している」と続いて、終わっている。ヴェルナーの悲劇はともかく、ヴィルヘルムがこの後半の言葉「悪魔に対する人間のポエジーの力」を信念として22番を擁護していたら、すなわちBAにおけるような、この話を「感動的な話」と信じる立場にあったなら、削除されなかったかもしれない。

ところで、この注釈を見る限りでは、ⅠもⅡも、先の三つの基準のうちの「最終的に口伝えに由来するという主張あるいは推測」という基準を満たしているとは、考えにくい。しかし、前にあげた、ヴィルヘルムのアルニムに対する反論から判断すれば、この基準に合致すると考えられる。ヴィルヘルムが、子供のときに母親からこの話を聞いた、と主張しているからである。古い文献から一足飛びにBAやKHMに採り上げられたのではなく、すなわち文献から文献へという単純な流れではなく、恐らくはその古い文献の当時からすでに、「口伝え」されてきた話なのであろう。とすると、22番は三つの基準を満たすことになるのである。

本文欄の削除記号

目次欄と本文欄の削除記号は、Bild. 1<sup>12)</sup>を見るとわかるように、明らかに形が異なっている。レレケによれば、目次欄にはヤーコプが書き、本文欄にはヴィルヘルムが書き込んだのであるから、当然のことかもしれない。ところ

Bild. 1

目次欄	本文欄
5. Der Wo lein	
6. Von de scheiße	Don t
7. Von den	
8. Die Han	Es
9. Die jwöl	Blindsd
10. Das Lui	leben ;
11. Brüderc	Frieden
12. Kapunz	

Bild. 2

lein	— 17
6. Von der Nachtigall und der Blind, scheiße	— 20
7. Von dem gestohlenen Heller	— 21
8. Die Hand mit dem Messer	— 23
9. Die zwölf Brüder	— 24
10. Das Lumpengefindel	— 30
21. Nischenputzel	Seite 86
22. Wie Kinder Schlachtens mit einander gepielt haben	— 101
23. Von dem Mäuschen, Vögelchen und der Bräunwurk	— 104
24. Frau Holle	— 106
25. Die drei Raben	— 110
26. Rothkäppchen	— 113
27. Der Tod und der Gänshirt	— 118
28. Der singende Knochen	— 119
29. Von dem Teufel mit drei goldenen	

が、問題の22番には本文欄への記入がないのである。単なる記入漏れと考えられなくもないと思う。しかし、このことから、ヴィルヘルムは22番の削除に積極的ではなかったことが考えられるのである。つまり、レレケの指摘するように、最終的には目次欄に4箇所削除記号を付けたヤーコプの判断で、22番は削除されたのである。

### 目次欄の削除記号

目次欄の削除記号の4つにしても、Bild. 2<sup>03</sup>に見られるように、22番に付けられた記号は他の3つに比べて、大きさも書き込む筆圧も、明らかに異なっている。22番のものは、小さく薄いのである。他の3つと同じ時点で記入されたとは考えにくい。どれほどかの時間のずれがあったとすれば、その間に何があったのか。また、4つとも同じ時点で記入されたとしても、22番だけが小さく薄いのは何故なのか。時間のずれの有無にかかわらず、ヤーコプにおいても、22番の削除に何らかの心理的逡巡が介在したのではないかと考えたい。

### 時代的要因

しかし、それでも削除せざるを得なかったのは、やはり、アルニムの言う

「残酷性」への非難に抗しきれなかったのであらうと思われる。アルニム一人の非難だけならまだしも、「産業革命の進行に伴って急激に起きた家族構造<sup>04</sup>の変化」すなわち市民的小家庭の形成によって、この時代、子どもをめぐる状況が変化したことも作用したのであらう。アルニムが「或る母親」を引き合いに出しているように、「当時、これまでより強く子どもの教育に関心をもちはじめた母親たちは『グリム童話集』を手にとったとき、これぞ貴重な読み聞かせの本だ<sup>05</sup>と思った」という時代的变化が、背景にあったことも影響したのであらう。

## 結論

後に、J. P. ヘーベルが、22 番Ⅱと同じように、家族が全員死んでしまう、「救い」のない『雌牛』という短編を書いている。リアリズム文学全盛の時代のヘーベルの短編小説と、それ以前のグリムの時代、ロマン主義の時代のメルヒェン、「読み聞かせの本」としてのメルヒェンとでは、比べるべくもない。しかし強調したいのは、それだからこそ削除せざるを得なかったと言えるのである。すなわち、メルヒェンをめぐる新しい時代の要求が、22 番を受け入れてはくれなかったのである。そして、この時代、いわゆる「子ども部屋」の誕生の時代から、「残酷」メルヒェンとそうでないメルヒェンとの峻別が行われるようになったのである。

## 注

- (1) ここでいう28話というのは、例えば表1中の Nr. 32 のように、32Ⅱが削除されても32Ⅰが残っている場合は、28話のうちに算入していない。32Ⅱの類を入れると、36話である。
- (2) グリム兄弟に話を提供した個人の中で、最もよく知られているのは、ハッセンプフルーク家の3姉妹、ヴィルト家の夫人と4人の娘である。
- (3) BA の話は、さらに以前の Jörg Wickram の著した „Rollwagenbüchlein“ (1557年) をその出典とする。
- (4) Zacharias Werner (1768~1823)
- (5) BA に載せたのはクライストではなく A. v. アルニムである、というシュタイ

クの説を、ゼンプトナーは否定し、クライストが掲載したとしている。(Dt. Vierteljahrsschrift 27. Jahrg., 1953, S. 602 Kleine Beiträge zur Kleist-Forschung)。ゼンプトナーは、もしシュタイクの言うとおりでとすると、アルニムのイニシャルのサインのない唯一の原稿になってしまうこと、後半の解説文の内容から考えて、等をその理由としてあげ、アルニムではなくクライストの原稿であるとしている。しかし、本論ではこれについては、問題にしない。

- (6) Kinder-und Hausmärchen, Gesammelt durch die Brüder Grimm, Vergrößerter Nachdruck der zweibändigen Erstausgabe von 1812 und 1815 nach dem Handexemplar des Brüder Grimm-Museums Kassel mit sämtlichen Korrekturen und Nachträgen der Brüder Grimm, sowie einem Ergänzungsheft: Transkriptionen und Kommentare in Verbindung mit Ulrike Marquardt von Heinz Rülleke, Vandenhoeck & Ruprecht, Göttingen 1986, S. 10.
- (7) Brüder Grimm, Kinder-und Hausmärchen, Ausgabe letzter Hand mit den Originalanmerkungen der Brüder Grimm, Philipp Reclam Jun., Stuttgart 1980, Band 3, S. 521.
- (8) 同上, S. 521
- (9) 84番と85番bが注に入れられていない例外であるが、いずれも断編であり、22番とは比較にならないものである。22番bが削除後どこにも入れられていないが、85番そのものがもともと „Fragmente“ (断編集) と題されていたこと、また、ヤーコプによって、aには「フランスの」、cには「ほとんど内容がない」、dには「ほとんど価値がない」というようにコメントが記入されていること、初版の注においても、bにはa, c, dに比べて簡単な注釈しか付けられていないし、その注釈の内容も、類話やバジレの『ペントメローネ』に完全な形があると指摘しているのみであること、などから、a, c, dが削除される中で、85番bは、ヴィルヘルムによって完全に削除されたものと思われる。
- (10) ハインツ・レレケ著／小澤俊夫訳：グリム兄弟のメルヒェン、岩波書店、1990年、S. 153.
- (11) 最後の2行のラテン語は、「豚、男の子2人、男の子1人。妻、夫／ナイフで、鹽の水、綱、苦しみ倒れる」という意味である。
- (12) 注6. Bd. 1, S. XXV, 20.
- (13) 同上, S. XXV, XXVI.
- (14) レレケ著／小澤訳：グリム兄弟のメルヒェン、S. 35.
- (15) 同上, S. 36. (くどう よしみ 本学教授・一般教育研究室)